永六輔

死にはする殺されはしない

死にはする　殺されはしない

再版発行　昭和五十一年七月十五日
著者　永六輔
装幀　田中一光
発行者　矢崎泰久
発行所　株式会社　話の特集
東京都渋谷区神宮前四―三〇―六―七八九
電話　四〇五―〇八一〇
製版・印刷　株式会社　大竹美術
製本　白石製本所
© 1976 Rokusuke Ei
〈検印略〉落丁本、乱丁本は本社にてお取替えします。

する　殺されはしない

話の特集

永六輔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

まえがき コラムのためのコラム 6
目 9
ピンク版世界の文学 25
SBコーナー 33
思うこと 61
ユーモアのすすめ 75
なんとか専科 99
野次馬聞書（げいのうかいうわさばなし） 117
活字ジョッキー 159
一枚の絵 229
目 245
あとがき 260

まえがき——コラムのためのコラム

僕は自分で職業欄に書きこむ時は「ラジオ・タレント」と書く。第三者が「歌手」とか「作家」とか、いろいろ肩書をつけてくれる場合、あえて否定はしないが、自分ではラジオ・タレントだと信じている。

NHKの『日曜娯楽版』に出演して以来二十三年間、ラジオのマイクからだけは離れたことがないのである。

初めて書いた原稿は、この『日曜娯楽版』のコント、しかも、投書であり、それを三木トリロー氏にひろわれたのがこの世界に入ったキッカケになる。

その時トリロー事務所のマネージャーとして逢ったのが野坂昭如サン。

彼は今、刑法一七五条と戦い、僕はつつましく、計量法違反を繰り返している。

この二十年間、考え方において、いつでも野坂昭如サンに見習ってきた。

『死にはする、殺されはしない』というのは弱虫という虫の五分の魂のつもりである。

この「コラム」という仕事でも彼は常に先輩だった。

偽悪者として振舞いながら土俵際では正義に殉じる構えをみせようとする。

立候補しての選挙戦では僕も行動を共にしたが、そのひたむきなまでの真面目さには頭がさがった。

四畳半裁判にしても、彼の書きつづけるコラムを読む限り、柔軟さが時にははしゃぎすぎることはあっても常に的はしぼられている。

コラムニストとしての野坂サンは小説家としてよりも、僕に影響を与えてきた。

もう一人、ファンといっていいのが、青木雨彦サンのコラムである。

日常性が前に押しだされ、町内どこにでもいる一言居士のようにみえるが、オットドッコイという気骨がある。

僕の場合、コラムというのは書く以前にしゃべるものとしてあった。

毎日、七分間、遠藤泰子サンを相手にしゃべっている『誰かと

どこかで』というラジオ番組は、原稿用紙七枚のコラムのつもりである。

その中から言葉で言いつくせないこと、又は記録しておきたいということを文章にする形であらためてコラムを書いてきた。

文章にしてみると、しゃべった時に気のつかなかったことが出てくる、それを又、番組の中のしゃべってみるという形で、ラジオと活字は補いあっている。

だから、ここに約二十年にわたる「コラム」を読み直してみると、同時に番組でしゃべってきたことを思い出す。

そして、なんとも進歩のない自分を見出さざるを得なくなる。

丁度各章ごとにある昔からの写真が実証するように、ただ肥ってきただけである。

体重でいうと五十五キロから七十五キロ、つまり二十キロの増加、それだけの変化だ。

しいていえば、六十年安保の挫折を経て、芸の世界にのめりこみ、そこで保守的であることの良さも認めざるを得なくなり、ジタバタした揚句に、尺貫法を復活させ、メートル法と併用させようと叫び出し、我々が法律を裁くのだと見得を切っているのが今日この頃。

尺貫法禁止という日本の文化の首を締めるような悪法と戦うことを通じて、すべての法律に対する国民の自覚に多少の刺激が与えられればと思うのはうぬぼれか。

現実に曲尺や鯨尺をつかう老人達や、古典芸能の世界の人達、つまり全く保守的な人達が「計量法粉砕！」と叫んでくれるようになってきた。

政府、法律を正しいと思うことは正しくないと気がつき、それを行動にうつしてくれる人達が一人でも増えれば、「怖しい時代」の歯止めになり、僕も又、野坂昭如サンの後から歩いてゆく自信が出来るというものである。

そんなことに気がつくまでの二十年間とは長すぎた。

目

一九七四年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

「目」について

七十四年、七十五年と『週刊朝日』に書いた「目」というコラムである。

山本七平、中山あい子、加藤登紀子、そして永六輔の四人が交互に各自のテーマで書いた。

僕にしてみると、テレビ出演をやめ、中年御三家、芸能座公演といった遊びの時期で、陶芸、石彫といったものも同時に始め、西武デパートで展覧会をやったりして、自分でもあまりの調子の良さに呆れはてた。

歌ったり、芝居をしたり、四十過ぎて狂うと色欲に限らず、とどまるところを知らないものである。

その間、某政党から立候補の打診もあったが、そこまで悪ふざけをしてはいけないと自己批判する余裕はあった。

テレビをやめたといっても山東昭子嬢の同輩になるほどオッチョコチョイではない。

ただ、テレビに出ていないと「お気の毒に」とか「がんばって下さい」といわれるのは驚いた。

まだまだテレビに出ている人は立派な偉い人と思う風潮が健在のようである。

計量法粉砕コンサートと称して地方を歩きまわることが選挙の事前運動だと思う人もいる。

もう、どうぞ御自由に、である。鯨尺を買い集め、それを必要な人に売っていることは事実である。

そして、これは立派な違反として逮捕されてもいいのだが、今のところ無視されている。

ヒョンなことから始めた僕の政治運動なのだが、いってみればこれも遊び、しかも「懲役三年以下、罰金二十万円以下」というスリルのあるもので、暫くはやめられない。

このことで国会の「議事録」や「法律」をいろいろ読むチャンスがあったが、読めば読むほど政治というものの野暮ったさに感動するばかりだった。

この国に政治屋はいても政治家はいないと思う。

肩書

このコラムにおける僕の肩書は「作家」になっている。
僕もそう思っていないし、読者だって、編集者だって、作家だとは思っていない筈である。
第一、作家と呼ばれる為の作品がない。
それでも肩書はいりませんという言葉は通用しないらしい。
今まで第三者につけられた肩書を並べると「評論家」「DJ」「司会者」「作詞家」「ジャーナリスト」「浅田飴」「放送タレント」「随筆家」が多く、要するに雑業なのである。
例えば小沢昭一の肩書が俳優になっている雑誌があるが、彼はこの三年、役を演じたことはない筈である。
俳優業よりも、カメラマンとして、大道芸のコレクターとして活躍している。
肩書の内容のかけ離れ方は王子製紙のスモーク・サーモン、東北電力のあわびにはじまり、製鉄会社のうなぎにいたるまで、今やその飛躍ぶりが楽しいくらいだから気にするのもおかしい。
とはいうものの、最近『君が代』の肩書が国歌で無いと知ってこれは気になった。
『君が代』を国歌だと決めている法的な根拠がないとなれば、僕のように国歌だと思わされてきたのはなんとも口惜しい。
法的には「準国歌」とか。国歌に準じて歌うという表現をしているが、それならそれで歌い方がある筈だ。
「千代に八千代にさざれ、意思の巌となりて」というように聞こえる妙な日本語の歌の肩書が国歌でなくてよかった。
永六輔の肩書がどうでもいいのと同じように、可愛らしく音程をはずす中学生歌手が芸術家といわれたって構わない。
暴力団の幹部だって団体役員で通用する。
肩書は、それを振りまわすか、それに隠れるかの利用価値しかない。
出来れば肩書とか、式典の時に胸に飾る造花の飾りとかは無い方がいい。
無職渡世の魅力は肩書の無い魅力だ。
政治家という肩書が恥ずかしいような今日この頃、とりあえず自分の肩書をもう一度みつめてほしい人の多いこと。
念の為だが、僕は「歌手」又は「陶芸家」といわれると天にもの ぼる心地がする。

（一九七四年一月二五日）

政治家風情

カリフォルニアの知事ロナルド・リーガンはかつての映画スターだが、そのカリフォルニアから政治家になろうとした友達に、フランク・シナトラがいった言葉がある。

「政治家なんかにはなるものじゃないよ、政治家は飼っておけばいいんだ」

ひと昔前、石田一松は「芸人風情が政治批判をするな」といわれて立候補をした。

その時にあえて「芸人から政治家に身を落した」といういい方をしている。

タレント候補を探している政党の話を聞くと、飼われる政治家が増えるんだなと思う。

事実、誰かに飼われている政治家の多いこと。

旅先で地方ボスに逢うことが多いが、「俺が○○を政治家にしてやったんだ」と公言する人を何人か知っている。

彼等は文字通り、自分が政治家にならないで政治家を飼っているのである。

このところ政党や個人の「はげます会」の案内状がよくくる。

勿論「欠席」にして「甘ったれるな」と書き添える。

政治家が集まって国民をはげます会をするなら筋も通るが、はげまされなきゃやらないような政党や政治家なら、だまって飼われている方が似合う。

財界や組織からの政治献金というときこえはいいが、金を出している方にしてみれば飼っているつもりなのである。

飼犬に手を噛まれることもあろうが、それでも飼っていることには間違いない。

誰にも飼われていない政治家もいる。

しかし彼等は野良犬同様に無力さを自覚している。

野良犬が強いのは群をなす時だが、目下は数が少ない。

こうしてフランク・シナトラの言葉に妙な説得力があるのは恐ろしいことである。

僕達は政治家の手玉にとられていることを、政治家を差別することで反発しているようだ。

政治不信ならまだ救われるが、政治家不信になったらもう助かりようがない。

選挙が近づき応援演説の交渉が増える度に、飼われている政治家に飼われるような弁士にはなるまいと思うのだが……。

おくめんもなく頼みにくるのだなァ、政治家風情が。

（一九七四年二月十五日）

やくざ社会

清水次郎長の資料をみていたら、荒神山の喧嘩の手打ち式の写真があった。

次郎長、大政、仙右衛門、七五郎、鬼吉といった清水一家と穴太徳一家がズラリと並んで記念写真におさまっている。

ところが、その実物のなんとみすぼらしいこと。

講談・浪曲・演劇・映画・放送でおなじみの胸のすくようなカッコヨサは連想も出来ない。

そう思っていたところへ、ルバング島の小野田少尉という新聞写真をみてドキンとした。

つまり、この感じなのだ。

大日本帝国陸軍とやくざを一緒にしては申しわけないが、これはあくまで写真の印象。

ただ親分に対して絶対服従という点では同じこと。

白を黒だといわれて、黒だといい通せないようでは乾分として落第の世界である。

大企業という名の親分が「私は知らない、乾分がやった」といえば、それッとばかり身替わりが自首して出るのも同じこと。

小野田少尉が悲劇の主人公であることは確かだが、今やスターであることも確かだ。

スターにならなかった悲劇の主人公こそ救われなければならないのだが、いつの世もそうはいかない。

芸能界というのはしたたかなところで、僕の知人の芸能マネージャーは小野田少尉をみつけて、テレビ出演、出版権などを独占した場合の利潤を計算し、プライベートな捜索隊を出そうとしていたが、そういう存在なのである。

事態は全く本人の意思とかかわりあいなく進んでいて、これは安川駐米大使の発言にも通じる。

石松の金毘羅代参ではないのだから、勝手に出かける日まで決められては困る。

この場合も次官が身替わりになってオシマイ。

話が分裂症気味になってしまったが、アメリカの評論家で「日本の国、又は国民性は、やくざ組織と重ねあわせることが出来る」と書いた人がいるのを思い出す。

そのやくざは喧嘩のことを「出入り」という。

用意された「手打ち式」の為に単なる出入りがあったというだけにしてあるのだが、小野田少尉は手打ちに応じるかどうか。

（一九七四年三月十五日）

政界漫才

田中総理が怒りっぽくなってきて、国会中継だけでなく、一寸した対談でも、すぐ興奮するようになった。

怒っているよりは怒らされていると同情してもいいのだが、精一杯のユーモアもヒステリーともとれるパンチが効かず、やっぱり人間としての幅の狭さを感じてしまう。

滅多に怒らない人が怒るなら迫力も説得力もあるが、怒ってばかりいるのは、笑ってばかりいるのと変わらない。

凄んでいるやくざよりも、笑顔のやくざの方がずっと怖いし、自分で笑わない喜劇役者こそおかしい。

なんとしても怒りっぽい総理を持った国民は不運である。

そんな自民党だけど、実にユーモラスなこともやっている。

ピカデリー劇場で上映中の『ペーパー・ムーン』を観にいったら、予告編やコマーシャル・フィルムにまじって「ストライキは物価をあげます」というアニメーション。そして「自民党」とタイトルが入る。

ここで満員のお客はドッと笑うのである。

子供も老人も笑うのだ。

僕はこのフィルムを製作しているのは共産党ではないかと信じている。

もし、本当に自民党だとしたら、裏返しの洒落としても実に高級なユーモアだ。

『ペーパー・ムーン』という秀作だが地味な作品の観客だから、知的水準の高さは保証出来る。

その客を笑わせるのである。

これだけのユーモアを持ちあわせた自民党の総理として考えると、あの怒り方も単純に受けとってはいけないのかも。

国民を笑わせようと努力した結果の怒り方だとしたら、僕達は政治不信は別にして、笑ってあげなければ。

漫才には「ボケ」と「ツッコミ」という役柄がある。

「ボケ」の自民党のこの努力に対して「ツッコミ」の野党が素人芸すぎる。

芸として評価する場合なら、僕は自民党のファンにならざるを得ない。

野党は素質がない芸人と同じ様なものだ。

ただ心配なのは、歌手同様にヘタクソなほど人気があるという現象が政治にもあてはまりそうだということである。

（一九七四年四月五日）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook